老年薬学会　薬物治療のあり方確立

初の学術大会に800人

一般社団法人日本老年薬学会（東京都千代田区）は14日都内で、学術大会を初開催した。高齢社会下の薬物療法の在り方について臨床・研究医や薬局・病院薬剤師、薬学研究者、管理栄養士、製薬メーカーの医薬品情報担当者らによる連携を呼びかける。薬剤師を中心に約800名が参加した。

秋下雅弘代表理事

学会は昨年設立　会員数は1400名

同学会は2016年1月に設立され、現在の会員数は約1400名。高齢者に対する薬物治療の適正化を研究・啓発することを目的として結成され、全国の大学での講演活動などに取り組んでいる。また、診療科を横断して患者の薬学的管理を図るほか、訪問調剤の場面において高齢者施設や患者の自宅の環境整備に対する視点を学んだ薬剤師に「老年薬学認定薬剤師」を認定するなどの活動に取り組んでいる。

東大の秋下教授　抱負をコメント

代表理事を務め、学会発起人の1人でもある東京大学医学部附属病院の秋下雅弘教授は「会員数は年度内に2000名を見込む。学会としての基盤は整った。この場での議論で老年薬学の在り方が決まっていく」と挨拶した。老年医学や薬学の変遷、役割について紹介したほか「高齢者は薬に依存している。しかし、若いころと同じように病気は完全に『治る』ものではない。一般紙などでも薬について取り上げられる機会が増えているが、間違った情報で不利益を被らないよう高齢者の意識変革にも取り組んでいきたい」と抱負を語った。

◀登壇するサン薬局奈良健部長

適切な投与を　有識者が議論

ポリファーマシー対策をテーマにしたシンポジウムでは行政、大学、病院、民間に所属する登壇者が見識を紹介した。サン薬局（横浜市）の奈良健在宅薬物療養支援部長は、薬局内組織である在宅訪問部門と訪問看護ステーションの業務連携を紹介した。例えば褥瘡の処置では、薬剤師が傷の状態に合わせて外用剤の選定を行い、看護師が患者の生活状況や全身状態の視点から提案することで、地域医療の質の向上に貢献しているという。

宮古島では、4月初旬に海開きをする。12月下旬から3月までは真冬で、泳ぐには寒すぎるが、4月に入れば時間を見つけて海に入る。先日、さっそく診療所のすぐ傍の岩場から泳ぎ出して、「宮国カメさん」と名付けたウミガメに会いに行った。

珊瑚の環礁の内側に住さらに温暖化が進む負のサイクルである。物に溢れた便利な生活を大多数の人が幸せと感じる限り、このサイクルは止められそうにない。それどころ

衝突流

くら憂いを持ったところで、国家レベルのエスカレートする理性を欠いた挑発行為には何の影響も及ぼすことはできない。

まるで、急速に進行する変わり、行きたい方向が正面になる。

皆がカメさんに学べば良いのにと思う。

て進んでいる。斜めに流されていくうちに角度が